

# わが国の最近1年間における教育心理学の研究動向と展望

## 発達部門(乳・幼児期)

### 乳幼児期の社会情緒的な発達

—この1年のわが国の研究動向を探る—

園田 菜摘

(お茶の水女子大学人間文化研究科)

#### I. はじめに

本稿では、日本の乳幼児発達心理学におけるこの1年の研究結果を概観し、乳幼児の発達に関する成果、問題点、方向性などについて考察していく。その際、昨年度の本年報の乳幼児部門(江尻, 1999)が言語・認知発達に焦点をあてたものであったこと、さらに筆者の専門領域を考慮に入れて、今年度は乳幼児期の社会情緒的な発達の研究分野を展望することとした。また、本来ならばこの1年の社会情緒的発達に関する研究成果をすべて報告すべきところであるが、研究の数の多さに比して紙数に限りがあり、さらに本年報の他部門との重複をできる限り避けるため、本稿では乳幼児期の(1)情緒的コミュニケーションの発達、(2)自己制御能力の発達、(3)他者理解の発達、(4)向社会的行動の発達、の4つにテーマに絞って概観を行うこととする。

資料の収集については、1998年7月～1999年6月までに刊行された心理学研究、教育心理学研究、発達心理学研究の論文と、日本心理学会、教育心理学会(1999年8月)、発達心理学会での学会発表を中心に行った。そのため、その他の学会誌、紀要、著書などで報告された優れた研究がある場合でも、ここでは挙げられていないことをあらかじめご承知いただきたい。

#### II. 情緒的コミュニケーションの発達

最初に、この1年で行われた乳幼児期の情緒的コミュニケーションの発達に関する研究を見ていく。ここでは特に、愛着関係、人見知り、社会的参照、注意の共有についての研究を取り上げていく。

##### (1) 愛着関係

愛着研究はこれまで乳幼児期の子どもを対象としたものがほとんどであったが、近年ではMainら(Gerge, Kaplan & Main, 1985; 1996)によって成人愛着面接(Adult Attachment Interview: AAI)の手法が確立し、生涯発達理論としての有効性を示しつつあるという特徴がある。特に、愛着の質が一つの世代から次世代へ(親から子へ)と受

け継がれていく愛着の世代間伝達の問題は、このAAIを通じて初めて体系的かつ実証的に解明され始めたと言えるだろう。しかし、これまでこのAAIの適用のほとんどは欧米圏のサンプルにとどまっており、日本という文化的土壌の中でどれだけ適用可能なものであるかは未知数であった。ここにきてようやくAAIワークショップに参加した数井を中心にして、日本のAAIのインタビュー・マニュアル(数井・遠藤・園田・宇佐美・古賀・菅沼・坂上・安治・田中・三原, 1998)が作成されるに至り、日本でのAAIの妥当性や可能性についての報告がなされるに至った。この研究メンバーである数井・遠藤・坂上・菅沼・安治・宇佐美・園田・田中・利根川・三原・倉持(1999)によると、幼児を持つ母親45組へのAAIインタビューで成人愛着の4分類(愛着軽視・拒絶型、自律・安定型、とらわれ型、未解決型)への日本の母親の比率構成を調べたところ、欧米圏の調査結果と際立った差異がなかった。このことは、日本でも適用の可能性があることを示していると考えられる。さらに、その母親の子どもの愛着の安定性を愛着Qソート法(Waters & Deane, 1985)で測ったところ、自律・安定型の母親の子どもの愛着の安定性が他の型の母親の子どもよりも明らかに高く、世代間伝達の仮説および欧米圏の研究結果の方向性に沿う結果が示された。AAIインタビューでの分類における日本語独特の言い回しの検討や、子どもの愛着の測定が愛着Qソート法では4つの型に分類できないことなど、今後の課題はまだ残されているものの、日本のサンプルを用いた成人愛着面接が行われ始め、子どもの愛着との世代間伝達の可能性が欧米圏と同様に示唆されたことは、十分評価に値するものであろう。

また、A.A.I.以外でも親自身の愛着経験を測定し、子どもの愛着との関連を調べた研究が行われている。斉藤(1999)は、子どもが10ヶ月時に母親自身の養育者との愛着経験をParental Bonding Instrument(PBI)で評定させ、子どもが18ヶ月時に家庭訪問で現在の母子の愛着関係をQソート法で分類した。その結果、自分の母親あるいは

父親は愛情があり温かだったと回想する母親は、そうでない母親よりも、自分の子どもとより安定した愛着関係を結んでいた。また、母親との関係が愛情深く温かなものであれば、父親の養育態度は現在の母子関係に対してあまり大きな影響を与えないが、母親との関係が愛情がなく共感的でない場合、父親の態度が現在の母子関係に影響していることが示されている。このことは愛着の世代間伝達があることを示していると同時に、父親との愛着関係の影響性は母親との愛着関係の質に依っていることを示唆していると考えられる。

さらに、これまでは愛着という親子の関係性と子どもの社会情緒的な発達との関連のみが注目されてきたが、最近では子どもの社会認知的発達とも関連することが示唆され始めているが (e.g., Meins, 1997; Fonagy, Redfern & Charman, 1997), 園田・数井・宇佐美・徳田 (1999) は幼児の他者理解を促す内的状態への言及 (自分や他者の感情状態, 欲求, 思考状態に言及すること) と愛着との関連を検討し, 情緒的発達と社会認知的発達のつながりを解明する試みを行っている。それによると, 38名の2, 3歳児とその母親のごっこ遊び場面, 本読み場面, 食事場面での母子相互作用の観察から内的状態への言及頻度を測定し, その後子どもの愛着の安定性を愛着Qソート法 (Waters & Deane, 1985) で測定したところ, 内的状態への言及と愛着の安定性との間には弱い負の相関があり, その相関の仕方は各場面で異なることが示されている。このことは, 社会認知的働きかけと子どもの情緒的発達との結びつきを考える上で, 場面ごとの相互作用の適切さが重要なポイントとなる可能性を示唆していくと考えられる。

“愛着”というトピックは, 世代間伝達, 社会認知的発達との関連なども含めて, 今後さらに広がりを見せることが予測される分野であるが, ただ単に欧米圏の研究を追跡するだけではなく, 日本独特のインタビューでの語りの特徴や場面ごとの相互作用との関連の仕方を見るなど, 文化的, 文脈的な視点を持った発展が期待される。

## (2) 人見知り

乳児期に子どもが養育者をそれ以外の他者と明確に見分け, 情緒的な結びつきを形成している指標となるものとして, 生後8ヶ月頃に見られる「人見知り」という見知らぬ他者への明瞭な回避反応がある。

この人見知りについて, 樂木 (1999) は, 乳児院での特異な反応に関する興味深い事例を報告している。人見知り自体は乳児院においても見られる反応であるが, その反応形態の中には家庭児における人見知り反応とは異なるものがあることが示された。例えば, 乳児自身がなついている保育者が私服で現れた途端にひどく動揺したり,

毎日関わっている著者に突然人見知り反応をしたり, ほとんど会っていない実母にのみ人見知り反応をしたり, 同一の他者に対して時間刻みに愛着と人見知り反応を繰り返したり, あたかも見知らぬ他者に対するようにぬいぐるみに人見知りをしたりする, ということが見られたのである。これは, 乳児院という特殊な環境での保育との結びつきは家庭での養育者との結びつきとは質的に異なるために, 乳児の特異な人見知り反応を引き起こしたと考えられるが, もしそうであるならば, 乳児の養育者への情緒的結びつきのメカニズムを明らかにしていく上で, このような乳児院での環境や働きかけの特殊性を検討していくことは, 非常に有用な手段であろう。

## (3) 社会的参照

子どもの年齢が上がって1歳頃になると, 他者との情緒的コミュニケーションとしての「社会的参照 (Social Referencing)」が始まる。これは, 新奇な対象や状況に対して身近な他者を参照してその表情から肯定・否定の情報を探索し, その情報によって接近・回避という自分の行動を調整するものである。

この社会的参照について小沢 (1999) は, (1)社会的参照を行わない場合でも社会的に導かれる学習がある, (2)社会的参照の生起には後天的な社会文化的要因が存在する, (3)情報探索は他者への注視行動に対する多様な解釈の一つである, という3つの仮説を立て, その検証を行っている。彼は, これまでの研究で乳児が情報探索を行わなかった場合の理由として, 単なる認知発達の遅れや乳児にとって新奇刺激への意味合いが異なるためであった可能性を挙げ, 従来の12ヶ月児よりも月齢を上げて18, 19ヶ月児を対象にする, 乳児が刺激に対して驚きや関心を示すまで刺激を変更する, などの妥当性の高い方法をとっている。また, 刺激提示時の乳児の母親への注視行動を, 母親自身によるものと行動学的基準によるものとの2種類で解釈を行い, 詳細なデータの分析を行っている。その結果, 母親自身が情報探索であると解釈したものと, 行動学的基準によって情報探索であるとされたものとの一致率は非常に低く, 情報探索は基準次第で変動することが示された。また, 母親の否定的情緒表出や養育態度について質問紙で調べたところ, 母親の情報探索への解釈には「子どもと自分は別個の存在である」などの相互独立の子ども観と言える考え方が関連し, 行動学的基準による情報探索への解釈には「理由があればいくらかでも叱ってよい」などの否定的情緒表出が関連した。このことから, 社会的参照は他の社会的学習様式や社会文化的要因を含めて解釈できることが示唆されている。

## (4) 注意の共有

次に, 乳児が行う別の他者の情緒の読みとりとして,

「注意の共有(joint attention)」が挙げられる。これは、10ヶ月頃から1歳半にかけて獲得する能力であり、他者が見ている方向や対象を追うという、経験世界を他者と分かち合うための重要な行為である。

村上・大平(1998)は、10～11ヶ月の乳児の心拍数と注視時間を測定し、注意の共有を行う相手である母親の表情が笑顔、怒りである方が真顔よりも、乳児は対象に注意を向け、注意の共有が成立したときに母親の顔を見ることは母親が笑顔であるときが最も多いことを示した。このことから、乳児は母親の表情を読み取った上で母親が見つめているものを探索し、それを共有しようとしていることが示唆されている。

### III. 他者理解の発達

子どもが1歳前後に示す他者との情緒的な結びつきに関する研究については上述したが、ここでは幼児になった子どもが他者の内的世界への理解へとさらに一歩踏み込んでいく様子について報告された研究を、感情理解、内的特性理解、心の理論、内的状態への言及、に分けて概観していく。

#### (1) 感情理解・内的特性の理解の発達

まず幼児期の感情理解の発達について、小堀・鎌倉・坂田・鈴木・藤本・糸井(1999)は、異なる感情を伴った読み聞かせが絵本の主人公に対する感情理解にどのように影響するかを検討している。それによると、幼稚園の年長児、年中児を対象に、主人公の声の表情を「優しい声」「怒った声」「普通の声」の3種類に分けて聞かせ、最後に主人公の感情を「喜び」「悲しみ」「怒り」の中から選択させたところ、ことばの理解が発達している幼児において、「怒った声」で読み聞かせられた場合に主人公の感情を「喜び」に同定する率が有意に低くなることが示された。このことから、幼児はことばの理解が発達するにつれて読み手の表現を受け入れ、主人公の感情理解に対して読み手と一致した捉え方をすることが示唆されている。

次に、他者が持っている内的特性への理解についての研究を報告する。松永(1999a)は、幼児が他者の内的特性をどのように把握しているのかについて、4歳児に実験的手続きを用いて検討を行っている。実験の課題として、いつも特定のネガティブ行動をする人物Nといつも特定のポジティブ行動をする人物Pが登場するアニメを、ペアになった子どもに提示し、その際の自発的な会話を分析するという手法を取っている。その結果、ほとんどの子どもが意地悪な人としてNを、優しい人としてPを選択し、行動特徴から登場人物の内的特性を理解していることが示された。また、行動としては異なっても、ネガ

ティブ／ポジティブという特性の面で同質であれば異なる行動とは判断せず、異なる特性をした時に異なる行動と判断した。このことは、4歳児はポジティブ／ネガティブという特性の両極で他者の行動をとらえ、それに基づいて他者の内的特性を把握していることを示唆していると考えられる。さらに松永(1999b)は、保育園の2、3歳児に同様の他者の内的特性を測る課題を行い、発達の検討を行っている。それによると、他者の優しい、意地悪という特性に関しては2歳代頃から理解され始めること、2歳では他者の内的特性を把握していてもそれと一致する行動予測は難しいが、3歳になると他者の内的特性をより明確に把握し、それと一致する行動予測もできるようになることが示されている。また、清水(1999)は、因果性(特性は行動の原因となるものと関連する)と安定性(特性は時間や場面を超えて安定している)という2つの特性概念の基本的特徴について、理解の発達の傾向を検討している。彼女は3～6歳児を対象にして、行為者の動機、行為者の行った行動、行動の結果からなる物語を提示し、行為者の特性のラベリングと他の場面における行為者の行動予測をさせた。その結果、特性ラベリング課題では3歳から動機情報を用いることができるが、結果情報に引きずられずに動機情報を用いることができるのは5、6歳児のみであった。行動予測課題では、3～5歳児は向社会的行動へと回答が偏っており、場面に依存した予測を行っていた。このことは、特性概念の基本的理解が獲得され、特性推論が可能になるのは6歳からであることを示唆している。

#### (2) 「心の理論」の発達

「心の理論」の発達について、これまでの研究で4歳頃を境にして他者の信念を理解する能力が獲得されることが示されてきたが(e.g., Wimmer & Perner, 1983; Wellman & Bartsch, 1988)、近年では実験方法を工夫して4歳以前の子どもの能力を引き出したり、「心の理論」の発達を促す日常的な相互交渉の過程を明らかにする研究が行われ始めている。

**表情偽装と虚偽の理解** まず最初に、「心の理論」の発達に関して、表情偽装と虚偽の理解の研究を見ていく。表情偽装とは、相手に誤った信念を抱かせるために意図的に本当の気持ちを隠して別の情動を示す表情を作ることであるが、この表情偽装を理解するためには、その状況に埋め込まれた様々な心的状態をふまえる必要がある。Harrisら(Harris, Donnelly, Guz & Pitt-Watson, 1986)はこの状況を“模擬説(Simulation Theory)”に発展させて、6歳児は“見かけの情動と本当の情動の識別に関する知識”をもとに他者の立場に立って考え、表情の偽装を理解することができるが、4歳児は他者の立場に立って考える

能力は十分にあるが、“見かけの情動と本当の情動の識別に関する知識”を持っていないために、表情偽装状況を理解できないとしている。このことについて宮本(1998)は、表情偽装は誤信念課題での“心の表象理論(観察された事実や他者あるいは自分の心的状態をそれぞれ別の表象として心に思い浮かべ、それらの関連を把握した上で状況を理解する際に用いる認知的枠組み)”で説明できると考え、3, 4, 6歳児の検討を行っている。その際に彼女は、表情偽装状況を幼児の日常生活で理解されやすい場面に設定し直し、説明もわかりやすく改良するという工夫を行っている。その結果、4歳児でも偽装された表情を理解することができ、さらに年齢に関係なく、誤信念課題ができる子どもは偽装表情状況も理解できることが示された。このことから、“心の表象理論”の有無は表情偽装状況への理解に深く関連しており、状況に埋め込まれた複雑な心的状態を理解する際に用いる指向の枠組みであることが示唆されている。

次に幼児期の虚偽の理解の発達について見ていく。虚偽の判断には、発話の真実性(発話内容が事実と一致しているか)、発話者の信念(発話者が発話内容を信じているか)、発話者の意図(発話者が相手をだまそうとしているか)が関連していると考えられている。この虚偽の理解について伊東(1999)は、4~6歳児に同じ物語を聞かせた後で、発話者の心情を欺瞞条件(相手をだます意図がある)、気遣い条件(相手を喜ばせるために嘘をついた)、上の空条件(だます意図はなく嘘を言うつもり)の3つに分けて説明し、発話者の意図と嘘であるかどうかを尋ねる方法で検討している。その結果、4, 5歳児では欺瞞の意図に関する質問に正答することは難しかったが、「発話者がだまそうとした」と答えた場合は「発話者が嘘をついた」と答えており、幼児期において嘘の判断においてはすでに意図の判断を反映させていることが示された。

**他者理解能力との関係** 次に、「心の理論」と他の他者理解能力との関連を見ていく。杉村・金崎(1999)は、3歳~5歳児を対象にして誤信念課題での成績と感情推論という他者理解能力との関連について検討を行っている。その結果、感情推論能力では年齢差は示されなかったのに対し、誤信念課題では4歳半ばを境に成績が上がり、誤信念課題での成績がいいほど感情推論能力が高いことが示された。このことは感情推論能力の発達が誤信念理解の発達を先導する可能性を表わしており、「心の理論」の発達を解明する上で今後の検討が期待される。

**相互交渉との関係** 「心の理論」の発達について、年齢的な枠組みだけでなく、近年では子どもの日常的な相互交渉との関連についても検討が行われ始めている。子安・服部・郷式(1999)は縦割り保育の幼稚園で年少、年

中、年長児に「心の理論」の誤信念課題を用いて検討を行っているが、それによると年少児は全員不通過、年中児は最年少の3人を除いて通過、年長児は全員通過する、という年齢差が示され、通過しなかった年中児の3人は、日常観察記録から見た活動面では他の年中児と大差はないが、言語的コミュニケーションにおいてやや気持ちが伝わりにくい面があることが示された。これは、日常的な相互交渉が心の理解の発達に影響を与える可能性があることを示唆するもので、非常に興味深い。

さらに、「心の理論」の発達を促す要因についての文化比較研究も行われている。許(1999)は、中国と日本の子どもの「心の理論」の発達の比較と、きょうだいの数の影響、質問紙調査による母親の持つ子どもの発達意識、養育意識を検討した。その結果、誤信念課題における文化差やきょうだいの数による差は見られなかったが、母親に尋ねた子どもの発達項目の中の「親に少しきつく叱られるとすぐふさぎ込む」と、養育態度項目の中の「子どもの好きなものなら高くても買ってあげる」「自分の関心、時間を子どもに取られて視野が狭くなる」について、評定が高い母親の子どもの方が誤信念課題での成績が悪いことが示された。このことから、文化を越えて、母親の持つ子どもの発達意識や養育態度が子どもの「心の理論」の発達に影響している可能性が示唆されるだろう。

### (3) 内的状態への言及

上述した子どもの「心の理論」の発達について、実験的な課題ではなく日常的な文脈の中で子どもの理解を調べる方法として、自己や他者の内的状態についての言及(欲求、感情状態、思考状態などに言及すること)がある。ここでは、このような子どもの内的状態への言及の発達について検討された研究を概観していく。

Bartsch & Wellman(1995)は、10名の子どもの心的状態への言及を縦断的に分析し、2歳代では欲求に関する言及がほとんどであるが、3歳前後になって思考と信念に関する言及が拮抗するという経過を報告している。しかし、そのような言及がどのようにしてなされるのかを知るためには、明確な心的状態への言及にはなっていないとしても、文脈から他者の心的状態に言及していると考えられる行為を分析していく必要があるだろう。佐藤・長崎・小野里(1999)は、1名の男児を対象にして、20, 25, 30ヶ月時点での母子の遊び場面の観察を行った。その結果、20ヶ月では自己や他者の感覚(「おいしい」「熱い」など)に関する言及が中心であったが、25ヶ月では自己や他者の欲求(「おかわりほしい」「ねんねして」など)についての言及が増加し、30ヶ月では自己や他者の思考(「どこに行くの?」など)についての言及が現れることが示された。このことから、1, 2歳児の心的状態への言及は、自己一他

者)〈欲求一叙述〉を2軸としてらせん状に発達しており、言及に関しては感覚から思考へと言及の高次化がみられることが示唆されている。また岩田(1999)は、1名の男児の20~37ヶ月の間の観察による発話データを基に、子どもの行為や状態を引き起こした原因に関する言及を分析した。その結果、因果性に関する言及のうち、最も多いのは行為/行動に関連させた発話であり、内的状態に関連させた発話は感情状態に関連させた発話(31ヶ月)、欲求に関連させた発話(36ヶ月)、心的状態に関連させた発話(37ヶ月)の順であることを示した。さらに、子どもが因果性について語り始めたの30ヶ月からであり、3歳頃までに内的状態についての発話が徐々に増加する傾向にあることを示している。これらの研究は、内的状態についての発話の発達を詳細に分析している点で興味深い。どちらも対象が1名のみなので、他の子どもでも同様のことが言えるのかどうか、もし個人差が大きいとしたらその個人差に影響する要因は何か、という所まで踏み込んで検討していくことが今後期待される。

子どもの内的状態への言及の発達は、家庭の中だけに限定されるものではない。子安・郷式・服部(1998)は、幼稚園の中での子どもの観察から内的状態に関する発話を分析している。その結果、年少、年中児では自分がやりたいことを主張するために慣用表現的に心的発話がされていたが、年長児では他者の知識を考慮に入れた上で心的な表現が使われることが示されている。このような集団場面での内的状態に関する発話は、子どもの「心の理論」の発達の程度を表わすだけでなく、仲間関係を成立させる上で重要な役割を果たしている可能性があると考えられるので、どのような使われ方をしているのかを調べることは非常に重要な問題である。

さらに、長崎・松浦(1999)は、このような心的(思考)状態語の獲得を支える行為遂行の発達を調べるために、子どもにとっては遊びである場面での他者の欲求意図の理解と、行為の遂行について検討している。その結果、自他の欲求を分離していなかったり、自他の欲求意図を同一化するような発話は年齢の増加とともに減少し、相手の欲求意図の自律性の理解を表わす発話は3~5歳にかけて漸次的に増加することが示されている。

子どもの内的状態への言及についての研究は近年ようやく増え始めているが、子どもの心の理解の発達を調べる一つの方法として、このような日常的な文脈の中での子ども自身の内的状態についての発話を検討することは、非常に有用であろう。今後は、様々な場面での子どもの他者との相互作用を検討することによって、どのような文脈で内的状態への言及が行われているのか、さらに内的状態への言及を促す要因についての検討を進めていく

必要があると考えられる。

#### IV. 自己制御能力の発達

次に、自己制御能力の発達に関する研究について見ていく。幼児期の自己制御行動の発達について、日本の子どもは自己主張・実現の側面と自己抑制の側面とのバランスが整わず、年齢を重ねるごとに自己抑制の側面の発達が上回っていることが柏木(1988)によって指摘され、このような発達の様相は、自己主張や独自性よりも自己を抑えて他者との協調・同調に価値をおく文化、という日本の特質を反映していると考えられている。そこでここでは、この自己主張と自己抑制の発達の違い、その発達に影響する要因、そして向社会的な行動との関連について行われた研究について概観していく。

##### (1) 自己主張と自己抑制の発達

幼児期の自己主張と自己抑制の発達を検討する研究として、金子(1999)は、日常場面の行動を観察することによって、3~5歳児の自己制御機能の発達を横断的に検討している。それによると3歳児では自己主張・実現的側面が自己抑制的側面よりも多く見られること、4歳児では自己制御機能に幅があり個人差が大きいこと、5歳児は道理を持って自己主張すること、自己抑制にはコントロールの能力が備わっていることが示されている。また、縦断的な研究としては、佐藤・目良・野村・柏木(1999)のものがある。彼女らは、幼稚園の年少、年中、年長児を対象にして自己主張・実現と自己抑制の個人内の発達の検討を行っている。その結果、子どもに絵画自己制御機能テストを行い自己制御機能を測ったところ、個人内の発達のバランスは自己抑制の方が自己主張・実現よりも高い子どもが多く、自己抑制の方が早期に発達する傾向が示された。また自己制御の理由に関しては、発達とともに未分化なものから具体的で分化した理由へと変化していく様子が示された。さらに、担任教師に子どもの自己制御機能について評定させるという方法が取られた研究も行われている。津川・坂野・柏木(1999)は、幼稚園の年中クラスの子どもの自己制御機能を担任教師に1年間に4回評定させている。その結果、子どもは加齢とともに自己抑制ができるようになり、4歳児では自己抑制の方が自己制御よりも高い傾向が示された。以上のよう、自己制御機能の発達に関する横断的研究、縦断的研究、教師の評定のどれを取ってみても、4歳頃を境に子どもの自己抑制機能が自己主張機能を上回る結果が示されており、自己抑制が強いことが日本の子どもの特徴であることが示唆される。

それ以外にも、子どもの自己制御の発達に関して鈴木(1999)は、5歳児の中で自己主張と自己抑制がともに高い

タイプの子どもと、自己主張が高く自己抑制が低いタイプの子どもをそれぞれ2名ずつピックアップし、それぞれのタイプの子どもの仲間関係の中での要求方略の違いについて、事例的な報告を行っている。

## (2) 自己制御能力に影響する要因

上述したような自己抑制の強さとは、果たして日本という文化的特徴のどの部分が影響した結果なのだろうか。ここでは、子どもの自己制御の発達に影響する要因として、家庭での環境と気質の影響についての研究を概観していく。

新美・内山(1999)は家族の雰囲気の子どもの自己制御行動に及ぼす影響について、母親への質問紙調査によって「くつろげる雰囲気」「厳しい雰囲気」などの家族の情緒的雰囲気、「表出性」「葛藤性」「知的・文化的志向性」などの家族の雰囲気、「夫婦間のコミュニケーション」「家族内の調和」など家族関係の測定を行った。その結果、特に家族内の表出性と葛藤性が子どもの自己主張を高め、家族内の表出性と知的・文化的志向性がトラブル場面での自己抑制の理想的判断を低めることが示され、家族の雰囲気が子どもの自己主張、自己抑制の両方に関連することが示唆されている。また首藤・二宮(1999)は、幼稚園児の母親に日常的に子どもに与える社会的ルールの内容を尋ね、さらに家庭で実際に子どもを叱ったり、指示命令や提案、説得をした場面を1ヶ月間ノートにつけてもらうという個別調査を行った。その結果、母親は子どもに日常生活の中で多種多様な社会的ルールを提示しており、要請のためのルールの方が禁止のためのルールよりも多く提示されていることが示された。個別調査からは、母親は子どもの生活習慣や自己制御に関係した場面で多くの働きかけを行っており、働きかけの多くは提案や説得や示唆を含んだ間接的なものであること、向社会的な場面では子どもが利己的行為を自発的に制御できるような働きかけを行う傾向があることが示された。

気質については、水野・本城(1998)が母親への質問紙調査から、1歳時の気質、3歳時の気質と母親のしつけ方略、4歳時の自己制御機能を測定し、自己制御との関連を検討している。その結果、子どもの自己主張的機能は新しい人物、事態に積極的に順応性のある気質的行動特徴と関連し、子どもの自己抑制的機能は順応性がありささいなことで機嫌が悪くならない気質的行動特徴と関連すること、また、自己主張・自己抑制とも高い自己制御高群は、気質的に扱いやすい子どもであり、母親の説明的しつけ方略を多く受けていることが示された。鎌倉・小堀・坂田・鈴木・藤本・糸井(1999)も同様に、幼児の自己抑制は周期性という幼児自身の気質と、その気質にたいする母親の特性不安が影響を与えていたことを

報告している。

以上のことから、子どもの自己制御機能は子どもの持っている気質と、家庭などの雰囲気やしつけ方略などの周囲の環境の両方による影響を受けながら発達していくことが示唆されるが、今後はさらに日本の子どもの自己抑制の強さを決定付けるような、文化的、文脈的な要因の検討が待ち望まれる。

## (3) 自己制御能力と向社会的な行動

相手に対して自分の欲求や意図を主張したり抑制できる自己制御能力は、実際の対人場面でのどのように社会的に望ましい行動と結びつくのだろうか。伊藤・丸山・山崎(1999)によると、自己主張も自己抑制もすると自分で認知している両高型の5歳児は、実際の場面で自発的に向社会的行動を取ることが多く、自己主張はするが自己抑制はしないと自分で認知している自己主張型の幼児は、実際の場面で仲間から援助を依頼される回数が少ないことが示されている。また、伊藤・樟本・山崎(1999)は、自己主張も自己抑制もすると認知している子どもは、自己を向社会的であると認知しており、仲間からの向社会的であるととらえられていることが示されている。

それに対して、自己主張と自己抑制のどちらも高いことが向社会的行動につながるのではなく、それぞれ社会的望ましきとは異なる関連を示す研究もある。森下(1999)は、年少、年中、年長児を持つ母親357名に質問紙調査を行い、幼児の自己制御と思いやり、攻撃性、養育態度との関連を検討している。その結果、子どもの思いやりは自己抑制の高い群の方が有意に高く、攻撃性は自己主張の高い群の方が有意に高いという違いが示されている。

以上のように、自己制御と向社会的行動との関連では、自己主張、自己抑制のどちらも高いことが重要であるという結果と、自己抑制は重要だが自己主張はネガティブに働くという結果が示されており、食い違いが生じている。しかし、後者である森下(1999)の研究では、母親への質問紙調査から子どもの自己制御能力を測定していることから、この手法の違いが子どもに直接尋ねた前者の研究とは異なる結果を示した原因となった可能性が考えられる。つまり、子ども自身が認知する自己主張と自己抑制の高さは向社会的行動と結びつくのに対して、母親の認知では子どもの自己主張は攻撃性と結びつく、という事実を表わしているのかもしれない。もし母親が自己主張に対してこのようなネガティブなイメージを持っているとしたら、それは日本の文化的な特徴の反映としてとらえられることができるかもしれない。

## V. 社会的な行動の発達

最後に、幼児期の社会的な行動の発達について、社会的コンピテンスと向社会的行動に関する研究について概観していく。

### (1) 社会的コンピテンス

幼児期の社会的コンピテンスの発達について、岡村・糸井・所 (1999) は仲間関係の中での問題解決能力との関連を検討している。彼女らは、3～5歳児の社会的コンピテンスを幼稚園の担任に評定させ、子どもに面接を行って「依頼」「けんか」「援助」の3つの状況での社会的問題解決の方法を尋ねている。その結果、社会的コンピテンスとして仲間との関係をうまく作っている子どもは、「依頼」という仲間の助けを借りる問題解決場面で要求を伝える能力があり、社会的コンピテンスとして集団の中で他者との交渉をよく行う子どもは、「けんか」という自他が対立する問題解決場面で大人の力を借りることが示された。また、5歳児では社会的コンピテンスとして集団の中で積極的に取り組む子どもは「援助」という困っている人のいる問題解決場面で向社会的発言を行って援助を行う傾向があることが示された。このことから、幼児期の問題解決場面において言語的手段や大人の介入を求めるという方法は、他者との望ましい関係を形成し、それを維持していくために有効なものであり、そうした解決方法を選択できることが日常場面でのコンピテンスの高さにつながっていると推測される。

### (2) 向社会的行動

次に幼児期の向社会的行動の発達について、樟本・伊藤・山崎 (1999) は、共感性の2つの指向性（自己の焦点付けられた「平行的共感」と他者に向けられた「応答的共感」と）の関連について検討している。彼女らは年長児34名を対象にして、平行的共感・応答的共感に関する質問から共感性を測定し、向社会的行動については自分がどの程度遂行できるかという自己評価と、向社会的な他の子どもを選択させるという形での仲間評価を測っている。その結果、応答的共感、平行的共感のどちらも高い子どもは、自己評価でも仲間評価でも向社会的であると評価された。このことから、向社会的であると評価されるためには、応答的共感、平行的共感のどちらも高いことが必要であることが示唆される。また小嶋 (1999) は、幼児が他者の嫌悪感に対してどのように行動するのかをテーマにして、向社会的行動について実験的に検討している。彼女は、5、6歳児に「ある子どもが遊んでいた玩具を取られてしまい、遊びをやめる」などの嫌悪感を示すストーリーを示し、自分が玩具を取った子だとしたらどのような行動をするかを尋ね、子どもが取ると答えた行動を、向社会的行動(玩具を返す)・反社会的行動(もう1つ玩具を取る)・非社会的行動(気にせず遊ぶ)に分けて分析している。その

結果、ほとんどの子どもが向社会的行動を取ると答えたことが示された。しかしこの研究では、多くの子どもが社会的に望ましい行動を取ると答えていることから、実際の幼児の行動を観察しても同様の結果が得られるかどうかを、今後検討していく必要があるだろう。さらに郷式・許・平沼 (1998) は、発達的な検討によって幼児は6歳になると相手との親密性による分与行動の違いが起こることを示している。

幼児期は、子どもの社会的コンピテンスや共感性の能力の発達とともに社会的行動が増加していく重要な時期である。子どもは親だけでなくきょうだいや仲間も含めた周囲の社会的な関わりの中で発達していくことから、今後はさらに日常的な関わりの中で子どもの実際の社会的行動の様相を取り出していく必要があるだろう。

## VI. 終わりに

乳幼児期の社会情緒的発達について、限定された範囲ではあったが、ここ1年のわが国の研究動向を概観してきた。そのまとめとして、以下に筆者自身の主観的感想を含めながら述べてみたい。

まず第1に、この1年の研究テーマとして、心の理論と自己制御能力の発達に関するものが数多く行われていたことが挙げられる。心の理論研究については、2年前の本年報(遠藤, 1997)でも数多くの研究が報告されており、近年最も注目されるトピックの一つであることは周知の事実であるが、自己制御能力の研究については、このテーマを取り上げている3年前の本年報(高橋, 1996)ではわずか1つ報告されていたのみであった。近年、“学級崩壊”“キレル子ども”といった子どもの自己発達に関わる問題に対して、歯止めがかかるどころかますますエスカレートする一方である社会状況の中で、「幼児期の育つべき自己主張・自己抑制とは何か」「自己制御能力に影響を与える要因とは何か」といった問いへの重みを、多くの研究者が感じていることの表われなのかもしれない。

第2に、研究の内容として、文化、文脈的な視点を取り入れたものが多く行われていることが挙げられる。特に愛着研究や心の理論研究において、欧米で行われている研究をただ追従するだけでなく、日本という文化的な視点や日常的な文脈の重要性を指摘する研究が行われていることは評価に値するだろう。愛着や心の理論を初めとした多くの理論は、欧米で生まれたものであるが、例えば愛着の数井ら (1999) の研究のように、理論自体は日本の文化の中でも適用可能であることをまずとらえた上で、そこにとどまることなく日本独自の特徴や文脈的な影響について探っていく方向性を持つことは、子どもの発達のメカニズムを明らかにしていく上で、今後も重要

な視点となるであろう。

第3に、方法論の改善によって、これまで見られなかった子どもの発達の姿が明らかになったことが挙げられる。これには、現在盛んに行われている心の理論研究での課題の工夫による遂行年齢を押し下げる試みから、人見知り、社会的参照、注意の共有といった以前から重要視されているテーマにおける、環境要因の検討、手続きの精緻化、新たな指標の導入などの手法の再考まで、幅広く見られる特徴である。最初に取り入れられた方法論に固執するのではなく、柔軟に様々な工夫を施すことによって新しい子どもの姿を示していこうとする姿勢は、大いに見習うべきものである。

### 引用文献

- Bartsch, K., & Wellman, H.M. 1995 Children talk about the mind. Oxford University Press.
- 江尻桂子 1999 言語発達・認知発達研究の動向と今後の課題 教心年報, 38, 35-50.
- 遠藤利彦 1998 関係性と子どもの社会情緒的発達：日本の乳幼児研究の1年を振り返る 教心年報, 37, 37-54.
- Fonagy, E., Redfern, S., & Charman, T. 1999 The relationship between belief-desire reasoning and a projective measure of attachment security (SAT). British Journal of Developmental Psychology, 15, 51-61.
- George, C., Kaplan, N., & Main, M. 1985 Adult Attachment Interview protocol (2nd ed.). Unpublished manuscript, University of California at Berkeley.
- George, C., Kaplan, N., & Main, M. 1996 Adult Attachment Interview protocol (3rd ed.). Unpublished manuscript, University of California at Berkeley.
- 郷式 徹・許 佳美・平沼博将 1998 親密性が幼児の分与場面に及ぼす影響 日心62回大会発表論文集, 198.
- Harris, P.L., Donnelly, K., Guz, G.R., & Pitt-Watson, R. 1986 Children's understanding of the distinction between real and apparent emotion. Child Development, 57, 895-909.
- 伊藤順子・樟本千里・山崎 晃 1999 自己制御認知タイプと向社会的行動との関連：向社会性に関する自己評価と仲間評価を観点にして 教心41回総会発表論文集, 331.
- 伊藤順子・丸山(山本)愛子・山崎 晃 1999 幼児の自己制御認知タイプと向社会的行動との関連 教心研, 47, 160-169.
- 伊東裕司 1999 幼児における他者の意図の理解と「嘘」の概念の発達 教心41回総会発表論文集, 681.
- 岩田美保 1999 1歳児における因果性への言及の発達：30ヶ月から37ヶ月の発話データから 教心41回総会発表論文集, 679.
- 鎌倉利光・小堀友子・坂田知華子・鈴木国威・藤本昌樹・糸井尚子 1999 母親の不安傾向(1)：幼児の自己制御機能に影響を与える要因 発心10回大会発表論文集, 329.
- 金子敏子 1999 幼児期における自己制御行動の発達に関する研究 教心41回総会発表論文集, 416.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会
- 数井みゆき・遠藤利彦・坂上裕子・菅沼真樹・安治陽子・宇佐美芳子・園田菜摘・田中亜希子・利根川智子・三原理恵・倉持清美 1999 親のAAIと幼児の愛着Qソート法との関連(1)～(2) 発心10回大会発表論文集, 259-260.
- 数井みゆき・遠藤利彦・園田菜摘・宇佐美芳子・古賀良子・菅沼真樹・坂上裕子・安治陽子・田中亜希子・三原理恵 1998 成人愛着面接 (Adult Attachment Interview) 日本語版第2版 非出版文献 茨城大学教育学部
- 小堀友子・鎌倉利光・坂田知華子・鈴木国威・藤本昌樹・糸井尚子 1999 絵本における他者理解について 発心10回大会発表論文集, 193.
- 小嶋佳子 1999 他者の嫌悪感に対する5, 6歳児の行動 発心10回大会発表論文集, 194.
- 子安増生・郷式 徹・服部敬子 1998 縦割り保育の幼稚園における幼児の相互交渉と〈心の理解〉の発達(2)：心的表現 日心62回大会発表論文集, 196.
- 子安増生・服部敬子・郷式 徹 1999 縦割り保育の幼稚園における幼児の相互交渉と〈心の理解〉の発達(3)：「心の理論」課題と発達検査との関連性 発心10回大会発表論文集, 295.
- 樟本千里・伊藤順子・山崎 晃 1999 共感の指向性のタイプと向社会的行動との関連：向社会性に関する自己評価と仲間評価を観点にして 教心41回総会発表論文集, 612.
- 許 佳美 1999 幼児の「心の理論」の発達ときょうだい数および母親の養育態度との関係：中・日比較調査 教心41回総会発表論文集, 226.
- 松永あけみ 1999a 幼児は他者の内的特性をどのように把握するのか 発心10回大会発表論文集, 432.



- 松永あけみ 1999b 2～3歳児クラスにおける他者の内的特性の把握と行動予測能力の発達 教心41回総会発表論文集, 335.
- Meins, E. 1997 Security of attachment and the social development of cognition. Psychology Press.
- 宮本祐子 1998 表情偽装状況の理解における幼児の“心の表象理論”の利用 心研, **69**, 271-278.
- 水野里恵・本城秀次 1998 幼児の自己制御機能：乳児期と幼児期の気質との関連 発達心理学研究, **9**, 131-141.
- 森下正康 1999 幼児期の自己制御と思いやり・攻撃性、親子関係との関連 教心41回総会発表論文集, 236.
- 村上久美子・大平秀樹 1998 乳児の joint attention と表情理解：心拍率変動性と注視時間を指標として 日心62回大会発表論文集, 311.
- 長崎 勤・松浦千春 1999 幼児は他者の欲求意図をどのように理解するか？：2～5歳児の工作・おやつ場面での選択欲求質問の遂行：文脈の成り立ち(6) 発心10回大会発表論文集, 433.
- 新美暁子・内山伊知郎 1999 家族の情緒的雰囲気が幼児の自己制御行動に及ぼす影響：絵画自己制御能力テストを用いて 発心10回大会発表論文集, 355.
- 岡村京子・糸井尚子・所里歌子 1999 幼児期における社会的問題解決能力の発達(II) 教心41回総会発表論文集, 497.
- 小沢哲史 1999 母親の養育態度が乳児の社会的参照に及ぼす影響 発心10回大会発表論文集, 321.
- 樂木章子 1999 乳児院乳児の人見知りに関する事例研究 発心10回大会発表論文集, 320.
- 齊藤早香枝 1999 乳児を持つ母親の被養育体験の回想と母子関係への影響：父、母それぞれの養育態度の影響 発心10回大会発表論文集, 214.
- 佐藤淑子・目良秋子・野村房代・柏木恵子 1991 就学前児の社会的認知的発達に関する縦断的研究(1)：社会的場面における自己制御機能の発達 発心10回大会発表論文集, 401.
- 佐藤裕里子・長崎 勤・小野里美帆 1999 幼児の心的状態への言及の発達：20, 25, 30ヶ月時点での〈自己—他者〉〈欲求—叙述〉軸による分析 発心10回大会発表論文集, 430.
- 首藤敏元・二宮克美 1999 幼児と母親のつくりだす日常の社会道徳的分脈 発心10回大会発表論文集, 359.
- 清水由紀 1999 幼児における特性推論の発達過程：特性概念の基本的理解の獲得 教心41回総会発表論文集, 586.
- 園田菜摘・数井みゆき・宇佐美芳子・徳田治子 1999 内的状態への言及と愛着との関連 発心10回大会発表論文集, 328.
- 杉村智子・金崎香織 1999 自分と特性の異なる他者の感情推論と誤信念課題に関する発達の検討 発心10回大会発表論文集, 161.
- 鈴木智子 1999 幼児の自己主張・抑制タイプが要求達成に及ぼす影響(3) 発心10回大会発表論文集, 428.
- 高橋道子 1997 わが国の最近1年間における乳幼児研究の動向：情動および関係性を視点に持つ研究を中心として 教心年報, **36**, 51-63.
- 津川 朋・坂野由美子・柏木恵子 1999 就学前児の社会的認知的発達に関する縦断的研究(3)：教師による行動評定 発心10回大会発表論文集, 403.
- Waters, E., & Deane, K.E. 1985 Defining and assessing individual differences in attachment relationships : Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton, & E. Waters (Eds.), Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development, **50** (1-2, Serial No.209), 41-65.
- Wellman, H.M., & Bartsch, K. 1988 Young children's reasoning about beliefs. Cognition, **31**, 239-277.
- Wimmer, H., & Perner, J. 1983 Beliefs about beliefs : Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. Cognition, **13**, 103-128.